

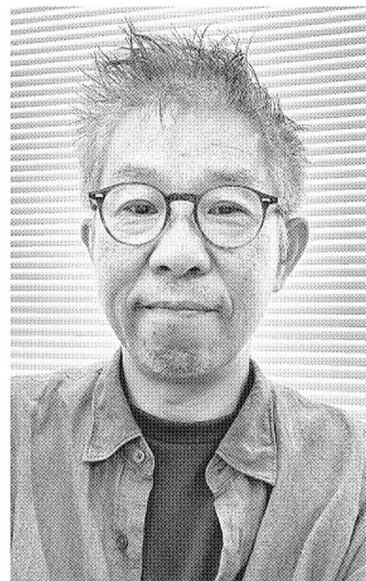
# 映像投影で地域ににぎわい

光雅・小川和男社長

少子高齢化で衰退を余儀なくされる地域社会の活性化策として、映像制作やプロジェクト、デジタルアート、デジタルアート活用が注目されている。地域固有の魅力をデジタルとサウンドという体感しやすい形で共有・再認識し、にぎわいと活力を与えるまちづくりの支援、さらには地域の活性化や都市再生の推進につなげようとするものだ。当社にも最近、プロジェクト、プロジェクトの問い合わせが多く寄せられている。その半数以上が地方自治体や観光協会だ。総じて「より魅力的な地域を形成したい」「にぎわいと活力をつくり出した」といったニーズが多い。一方、予算には差があり、危機感を強く抱いているものも断念せざるを得ないケースもある。一般にプロジェクト

## 中堅・中小の現場から

### 費用抑え顧客とニーズ共有



《会社概要》	
▽本社	東京都新宿区
▽事業概要	企画、デザイン、印刷、ウェブ・動画・アプリ制作、拡張現実(AR)
▽設立	2013年6月
▽従業員数	12人(24年2月末時点)
▽売上高	1億4000万円
	(23年12月期)

プロジェクトは高額になることが多い。会議室のスクリーンにはコンピューター・グラフィック(CG)などを多用し、映すのは異なり、投影面が立体物だったり濃い色味をしていたり、プロジェクトを制作時間が膨大になる。このため制作会社側には、置く場所が野外的場合は周囲の状況との兼ね合いに工夫が必要だったりする。それらをクリアするために複数回の現地試験を繰り返す。

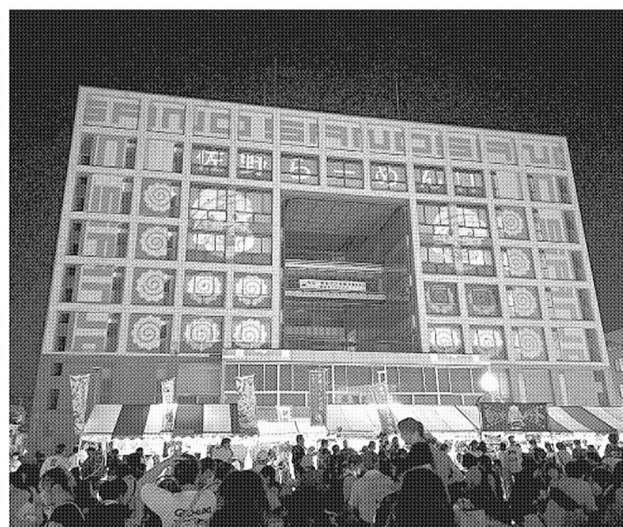
コンテンツも地域に伝承された物語の再現や感性に刺さるような印象的な造作には、制作時間が膨大になる。このため制作会社側には、置く場所が野外的場合は周囲の状況との兼ね合いに工夫が必要だったりする。それらをクリアするために複数回の現地試験を繰り返す。

県佐野市役所の外壁面全体に、ご当地の歴史や伝説を投影した案件では、プロジェクトの設置場所を市役所のテールと当社のスチールラックで作成し、業者の足場代を削減し、高輝度のプロジェクトは当社所有機材と同クラスのレンタルを重ね合わせることで削減した。結果、1000万円以上のコストを削減し、予算内に抑えた。

当社はプロジェクト、プロジェクト専門ではない。19年、出版物の製版会社として創業し、自然とビジネスの軸足が増えた。ノートパソコン「MacBook」の登場で出版物をデザインから手掛けるようになり、スマートフォンやスマートフォンの普及で企業の広告やカタログを作り、製版もできるデザイン会社となった。現在はアプリやメタバース(仮想空間)の制作、謎解きイベント、オンライン配信など多

発注者にとってコストパフォーマンスの良い施策、制作会社にとって持続的な事業であることのそれぞれを実現するには、両者が深くニーズを共有することが重要だ。顧客満足度の向上に向けた挑戦を続けていきたい。

＝ 随時掲載



コストを大幅削減して実現した栃木県佐野市役所のプロジェクト